

## 学位論文審査の結果及び最終試験の結果の要旨

学位申請者氏名	高橋瑞菜	
学位論文名	Association between number of teeth present and mandibular cortical erosion in Japanese men and women aged 40 years and older: A cross-sectional study (40 歳以上の日本人における下顎骨皮質骨粗鬆化と現在歯数との関連)	
論文審査委員	主査:	松本歯科大学 教授 小笠原 正 (印)
	副査:	松本歯科大学 教授 芳澤享子 (印)
	副査:	松本歯科大学 講師 荒 敏昭 (印)
	副査:	(印)
	副査:	(印)
	副査:	(印)
最終試験	実施年月日	2017 年 1 月 18 日
	試験方法	口答 . . . 筆答
学位論文の要旨		
<p><b>【目的】</b> パノラマ X 線写真で検出された下顎骨皮質骨の粗鬆化は高齢者の骨粗鬆症のリスクの増加と関連している。さらに、多くの報告では歯の喪失と骨粗鬆症の間の関連性を実証している。しかし、下顎骨皮質骨の粗鬆化が歯の喪失と関連しているかは不明である。そこで、本研究の目的は、40 歳以上の日本人の男女の下顎骨皮質骨の粗鬆化と、現在歯数との関連を明らかにすることとした。</p> <p><b>【方法】</b> 本学大学病院を受診し、歯科治療のためパノラマ X 線写真を撮影した 839 名 (男性 293 名、女性 546 名) の患者で、年齢は 40 歳から 89 歳 (平均[SD] 63.7 歳 [10.6]) を被験者とした。パノラマ X 線写真の下顎骨皮質骨形態を 3 分類した。パノラマ X 線写真における皮質骨形態分類の評価は名前、年齢および現在歯数をブラインドしたうえで評価した。下顎骨皮質骨形態分類の評価は、カッパ係数で、再現性を確認した (個人内: 0.87、個人間: 0.71)。年齢、身長、体重、糖尿病、リウマチ、高血圧、デンタルフロスや歯間ブラシの使用、口腔清掃回数、喫煙の有無、アルコール摂取、骨粗鬆薬を独立変数として、現在歯数を従属変数として重回帰分析を行った。</p> <p><b>【結果と考察】</b> 重回帰分析では、軽度から中等度の骨粗鬆化 (<math>P=0.007</math>)、そして高度粗鬆化 (<math>P&lt;0.001</math>) が現在歯数と有意に関連していた。共変量分散分析にて寄与因子を補正した分析では、下顎骨の皮質骨形態分類と現在歯数との間に有意な関連が見られた (<math>P&lt;0.001</math>)。高度の骨粗鬆化と評価される下顎骨皮質骨形態の被験者は正常な皮質骨の被験者 (平均[SE]20.7 本[0.5] vs 23.4 本[0.3]、<math>P&lt;0.001</math>) と、軽度から中等度の粗鬆化と分類できる皮質骨形態 (22.2 本[0.4]、<math>P=0.04</math>) の被験者に比べ有意に少ない歯数を示した。軽度から中等度の骨粗鬆症の皮質骨形態の被験者は正常な皮質骨の被験者 (<math>P=0.033</math>) に比べ有意に少ない現在歯数を示した。40 歳以上の日本人男女の下顎骨皮質骨の粗鬆化と現在歯数の有意な関連が示された。</p>		

(様式第 13 号)

学位論文審査結果の要旨	
<p>学位申請論文は、下顎骨皮質形態と現在歯数との関連性を明らかにした論文である。多くの先行研究で下顎骨皮質形態は、骨粗鬆症との関連性が明らかにされており、本論文は骨粗鬆症スクリーニングに用いられる下顎骨皮質形態分類と現在歯数との関連をみたものである。下顎骨皮質形態の評価も適切に行われ、多くの項目と現在歯数との関連性を検討し、重回帰分析と共変量分散分析により下顎骨皮質骨の粗鬆化が現在歯数にマイナス要因として関連していることを明らかにした。用いられた統計手法も適切であり、得られた結論も適切である。臨床研究として重要であり、骨粗鬆症患者への歯科的健康に寄与する優れた論文と言える。</p> <p>以上のことから、本論文が博士（歯学）の学位論文に値すると評価した。</p>	
最終試験結果の要旨	
<p>申請者の学位申請論文「Association between number of teeth present and mandibular cortical erosion in Japanese men and women aged 40 years and older: A cross-sectional study（40歳以上の日本人における下顎骨皮質骨粗鬆化と現在歯数との関連）」に関する基礎知識、論文の内容に関わる事柄、研究成果などについて、口頭試問を行い明確な回答が得られた。</p> <p>質問事項は以下の通りである。</p> <ol style="list-style-type: none"><li>1. 本研究結果の臨床上の有用性</li><li>2. 重回帰分析について</li><li>3. 共変量分散分析について</li><li>4. カップ係数が本研究で使われている意義</li><li>5. 下顎骨皮質骨形態における骨粗鬆症のメカニズム</li><li>6. 本研究の意義</li><li>7. 本研究の今後の展開</li></ol> <p>以上より、本審査会は学位申請者が博士（歯学）として十分な学力および見識を有するものと認め、最終試験を合格と判定した。</p>	
判 定 結 果	合格 ・ 不合格

備考

- 1 学位論文名が外国語で表示されている場合には、日本語訳を（ ）を付して記入すること。
- 2 論文審査委員名の前に、所属機関・職名を記入すること。